

### 1. 3年間の活動評価

3年間にわたる本事業の取り組みは、静岡県を拠点に全国展開した多様な取り組みから成り、今後の静岡におけるESD推進の基盤となるものでありとらえることができる。

推進事業名は、「質の高い幼児教育の推進と学校間の接続」となっているが、活動内容から考えると、「多様な社会教育施設との連携による質の高い幼児教育・ESDの推進」ともとれる内容であり、幼児教育を基軸に置いている点、動物園との連携を中核に据えている点が、特徴的であり、全国への示唆を与えるものではないだろうか。

中でも、幼児教育を中核に据えたことの意味として、子供は本来「ESD的な考え方ももっており、それらのよさを引き出す」といった考え、この時期の子供にこそしっかり対応することが大切であるといった考えに立っている点が、今後のESD推進の鍵となる。

また、多様な人・団体とのかかわりを広げただけでなく、フォローアップを重視することで、単発の活動に終わるのではなく、持続性・発展性を担保しているところが、取り組みのよさとして特筆できる。

最後に、今回の取り組みでは、計画段階では記載されていない取り組みが、実際にいくつも展開されている。このことは、本実践研究が、固定化された内容をこなすものではなく、目標をしっかりと確認しながらも、内容や方法においてはいかに創造的、柔軟に展開されたかを示すものであり、取り組みのよさではないかと考える。

### 2. 今後の期待

今後、これらの取り組みが一層充実・発展したものとするために、以下のことが大切ではないかと考える。

#### (1) ESD実践者の手ごたえ

今回、様々な方々が、ESDの考え方を知ることで賛同され、さらなる指導者への広がりを見せたことが読み取れる。今後は、実際に指導者一人一人が、ESD実践を粘り強く行う中で、子供の変容を手ごたえとして実感してもらうことで、一層強化できる。

#### (2) 第2、第3の田宮先生の育成

広い静岡県全体に普及するには、中心となるESD指導者を多教育成する必要があるのではないだろうか。

この点は、急には解決しないと思うので、慌てて広げようとせず、今回の取り組みのように、少しずつ人から人へ広がっていくやり方のほうが手堅く、持続可能性も高まると考える。

#### (3) 持続化の名活動資金調達体制の確立

補助金による本事業が終わった後も、活動を続けるには、活動資金が必要となる。どのように資金を調達していくかについても、考えていく必要がある。

本年度は、3年目の独自課題とこれまで3年間の事業のまとめの遂行ということで、多大なエネルギーを要したことと思います。そのような中で、最終段階を迎えていることに対して、労をねぎらうと共に敬意を表したいと思います。

ユネスコ活動費補助金はその性格上、事業を継続するためにあるいは引き継ぐための方策を提示することが大事ですが、本事業はこの3年間の事業採択でPlan(計画)、Do(実行)、Check(評価)、Action(改善)のPDCAサイクルを毎年的確に行っているため、そのことは難しくないと考えています。

ここでは、特に3年目の中心となる2つの事業について感想を述べさせていただきます。最初に、「全国幼児教育ESDフォーラム2021」ですが、参加者の多さ(全体260名)に驚きました。これは本事業の目的、そしてその内容と方法への関心の高さを示していると思います。また、対象も幼児教育関係者を中心として、ESD・SDGsを実践している方々等の幅広い参加があり、しかも多岐にわたる発表が盛りだくさんで、参加者にとって有意義な催しであったと思います。一方、ポスター展示発表も同時に実施され、多様な学びの機会を提供されたことも意義があったと思います。

次に、「SDGsデジタル絵本プロジェクト2021」ですが、プロジェクト独自の教材や協力・連携組織との共同開発の教材をミニ絵本、ポストカード、デジタル絵本として実現し、また、それらを発達段階に応じて低学年・高学年バージョンとして制作されています。このことは、具体的成果物(アウトプット)として、本事業が評価される要因になると考えられます。

もちろん、以上の2つを遂行するには、教育委員会との連携・協働は不可欠です。そのことは報告の最初に述べられていますが、教育に係わる企画や運営において県や市の地方自治体との協力体制が重要なことは言うまでもありません。本事業は、教育委員会との係わりが大きく打ち出されており、事業の成果にその反映を見ることができますので、大変合理的であったと言えます。

最後に、本プロジェクトを3年間拝見させていただきましたが、その概要を武道や芸道の修行における段階として使われる「守・破・離」にたとえると(守は基本を確実に身に付ける段階、破は工夫して基本を発展させる段階、離は独自のものを生み出し確立させる段階)、この言葉通りに進んでいるような感じがします。

これからの様々なチャレンジに期待します。

## ESDを基軸とした質の高い幼児教育の推進と学校種間の接続:幼児教育の原理・理念からのESDへの提言 事業報告と外部評価委員による事業評価

ESD・国際化ふじのくにコンソーシアム事務局 静岡県静岡市大谷836 静岡大学教育学部  
プロジェクトリーダー 田宮 縁 tamiya.yukari@shizuoka.ac.jp

## ESDを基軸とした質の高い幼児教育の推進と

## 学校種間の接続:

## 幼児教育の原理・理念からのESDへの提言

## 事業報告と外部評価委員による事業評価

2022年2月2日(水) ホテルアソシア静岡

### 事業概要

本事業は、ESD・国際化ふじのくにコンソーシアムを母体に、多セクター連携によるSDGs達成の中核的な担い手となる教師教育の推進を目的としている。3年目となる令和3年度は、過去2年の知見を幼児教育の原理・理念から省察し、質の高い幼児教育と学校種間の接続についてのまとめの年と位置付け、以下の2つを主たる事業として行った。

#### (1)「全国幼児教育ESDフォーラム2021」の開催

#### (2) 教材開発「SDGsデジタル絵本プロジェクト2021」の展開

#### (1) 全国幼児教育ESDフォーラム2021

「ともにつくる学びの場」をコンセプトに、ハイブリッドでフォーラムを開催し、教育関係、社会教育施設、一般企業、学生、NPO、一般の260名(対面75名を含む)が参加した。第1部は、学校教育、社会教育、家庭教育をつなぐ「SDGsデジタル絵本プロジェクト」に関する実践の省察、第2部は、自然環境、福祉の視点から、人の発達をつなぐ「ソダツバ」を展開している社会福祉法人の実践の報告を中心に、行政による質の高い幼児教育の新しい研修スキームなどさまざまな立場からESDの実践の省察を行い、ESDにおける教師教育の要諦に関する提言がなされた。『報告書』、「報告書概要版」は、Webサイト「ノットワークラボ 活動報告」より閲覧できる。

#### (2) SDGsデジタル絵本プロジェクト2021

ワンヘルスという概念をベースに統計資料も加えた高学年バージョン『動物と一緒に地球の未来を考えよう～森は簡単には回復しないんだ～』、及び動画版(低学年バージョン、高学年バージョン)を制作した。SDGsデジタル絵本はWebサイト「日本平動物園学習プログラム」より閲覧できる。



#### (3) その他

##### ① ESD・国際化ふじのくにコンソーシアム / 静岡大学教育学部主催事業

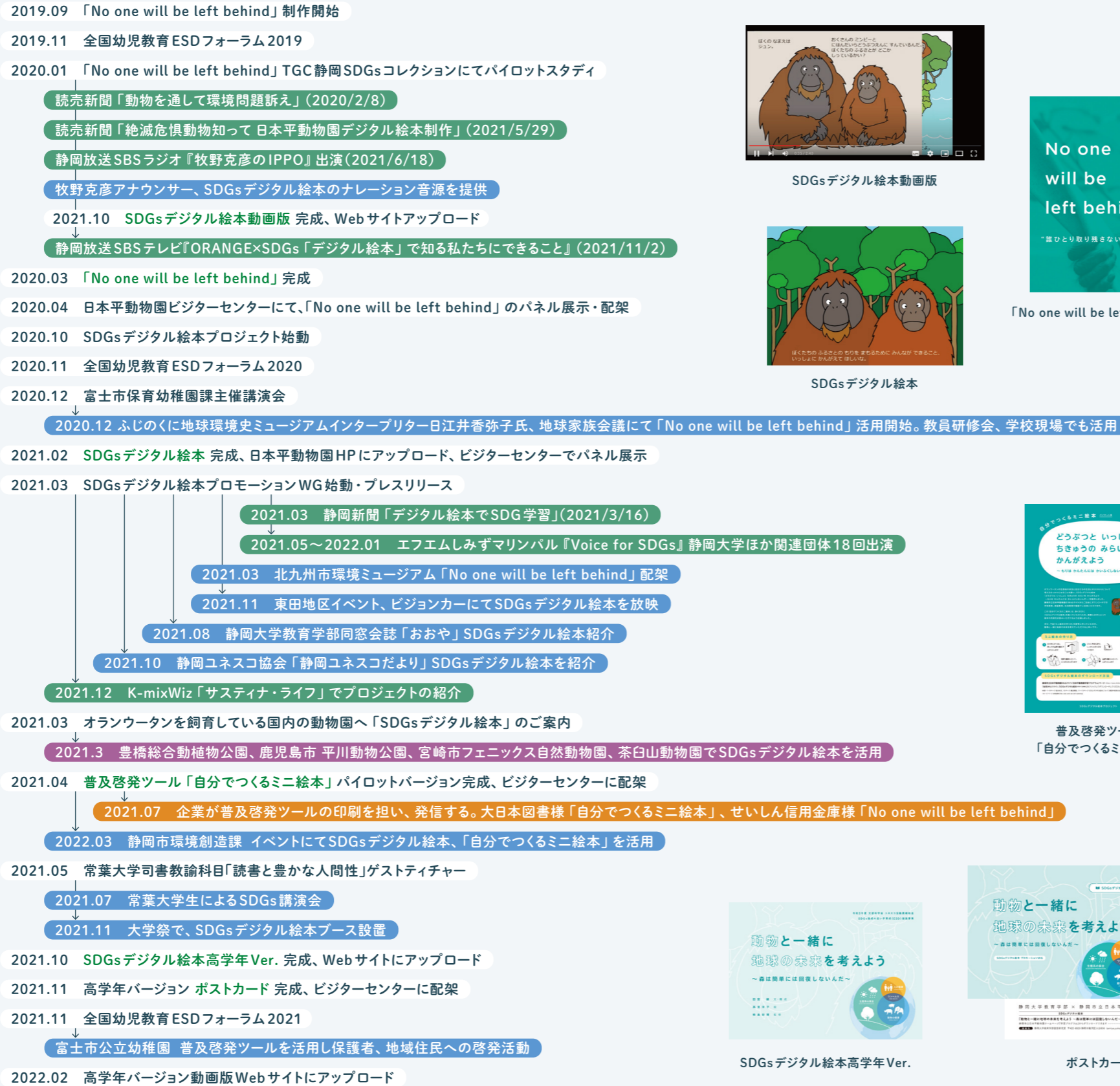
・オンデマンド配信	トークショー: 日本平動物園魅力再発見	2,231アクセス(2022年1月末時点)
・11月12日	全国幼児教育ESDフォーラム2021	260人
・12月17-19日	ユネスコスクールの遊びと生活展	650人
・3月29日	全国幼児教育ESDフォーラム2021フォローアップ研修会	未確定

##### ② 教育委員会等との連携事業

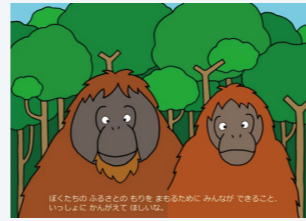
ESDに特化した研修会 855名以上	・6月19日	日本生活科・総合的学習教育学会第30回全国大会静岡[富士山]大会
	・7月14日	常葉大学SDGs講演会
	・9月21日	富士市教育委員研修会
	・12月21日	富士市保育幼稚園課講演会 など
大規模研修会の一部に ESDを組み込んだ研修会 1,975名以上	・5月26日～2月10日	静岡県教育委員会幼児教育推進室保育プロセスの質リフレクションシート活用研修会
	・5月28日～1月21日	富士市教育・保育訪問支援事業
	・7月26日	浜松市こども家庭部幼児教育・保育課主催研修会
	・10月18日	静岡県教育委員会幼小接続期の教育・保育研修 など

オンラインも含め、6,000名程度の方が本事業にアクセス、開催のべ数は22件以上あった。  
静岡市日本平動物園との連携による「SDGsデジタル絵本プロジェクト」の視点から本事業を俯瞰する。

## 「SDGsデジタル絵本プロジェクト」におけるアウトプットとアウトカム



SDGsデジタル絵本動画版



SDGsデジタル絵本



「No one will be left behind」



普及啓発ツール  
「自分でつくるミニ絵本」



SDGsデジタル絵本高学年Ver.



ポストカード

ユネスコ・アジア文化センター 教育協力部 部長

## 大安 喜一

### 成果と波及効果

本事業の目的である多セクター連携および教師教育推進は、全国幼児教育ESDフォーラム開催とESD教材開発を柱として、所期の計画に基づく成果が出された。また、これらの事業活動と連動して、各参加機関が主体的に、問題意識に応じた課題を設定し、研修会などのフォローアップ活動を実施する波及効果が見られた。事業報告会では、遊び、協同、生き物、循環、環境といった、個々の活動において見えてきた共通項から、本事業の目的につながる意味付けがなされた。これまでの成果を、行政の政策と予算化といったインパクトにつなげるために、事業の知見とロールモデルとしての経験を、プロジェクトチームが実践知として集約し、行政を含めたステークホルダーとの対話を進めることが大切である。

### 学びとつながり

本事業では、幼児教育における生活圏の活動をとおして、予め決められた共同作品の中での活動よりも協同的で創造的な活動を重視している。「協同」という用語に関して、共同や協働など、同音でも異なる単語が教育現場において使用されていることから、先に述べた意味付けの議論がさらに深まれば良いと考える。こどもの活動を通じた大人の学び、また、学習指導要領をきちんと学ぶといった、職員の学びの重要性も、今回の事業報告から明らかとなった。管理職を含めた研修の必要性、さらに、社会教育施設である動物園との連携から他の教育施設や地域組織との連携の広がりも期待される。

本事業のネットワークの特長として、静岡大学というハブの中心を介して、すべてのコミュニケーションがおこなわれるのではなく、それぞれの組織や地域のクラスターごとに主体的につながりを展開していることがあげられる。地域特性や文脈に応じた形で各組織・地域が活動をおこなうと同時に、定期的な交流、情報交換や議論の場を設けていくことで、補完的相乗的な効果が生まれるであろう。

### 海外との連携

全国フォーラムを含めた国内における発信とネットワークを基に、海外との連携の可能性を検討してはどうだろうか。幼児教育はSDGsの教育目標にも挙げられており、従来の優先分野であった初等教育の普及が進んできたアジアの国々の関心も高い。ユネスコ・バンコク事務所では近年、コロナ禍での学びの継続、政策と財政、母語による学び、などのテーマで幼児教育に関する出版物を発行している。また、コロナ禍で人物交流が制限される中、国内外のオンライン会合の可能性が広がり、ユネスコスクール関連でも、さまざまなテーマの国際会合が頻繁におこなわれている。ACCUでも同時通訳を手配の上、国内外の関係者が対話する機会を設けており、本事業と連携して、幼児教育における共同企画の可能性を検討できればと考える。